

平成 22 年度
教員との討論会
報告書

外部評価委員会 学生委員会

目 次

I. 概要	-----	2
II. テーマ1「授業に対する意見」	-----	2
III. テーマ2「開講して欲しい科目」	-----	8
IV. テーマ3「学科のシステムに関する意見」	-----	8

I. 概要

日時：2010 年 3 月 8 日 11：10～12：40

場所：本館 3 階 第 2 会議室

なお、本報告書は、以下の記号を用いる

T：担当の先生，S：学生

II. テーマ 1 「授業に対する意見」

1. 有田先生への質問

S：水理学は予習を前提とした講義なのですか？

T：水理学は予習がないとついていけないが、復習の方が大事

S：予習などを行いたい、カリキュラム（シラバス）と進み方が違うので取り組みづらい

T：今後は、シラバス通りに進めていきます。

S：テストで、問題用紙に回答するために必要な公式が既に出てあり、まじめに勉強してきた人とそうでない人とで点数に差がなくなってしまう、不公平なのではないか？

T：公式は暗記するものではなく、試験では如何に理解しているかを問うているものである。その一方で、公式を書いてあっても解答できていない学生が多いように感じる。

S：先生が考える「適切な資料」とはどのようなものですか？

T：必要最低限の内容で理解できるような工夫や、読み物のように学生が興味を持てるように配慮した資料の配布を心がけている。

教科書と講義内容が違うということはない。

S：宿題の増量を望む声も上がったのですが、それについてどのように考えているか。

T：宿題の増量を希望という意見は意外だが、希望があればいくらかでも出します。しかし少し勉強すれば解答できる問題なのにテストでは取れていない現状がある。

講義中に演習の時間をつくる。

S：出席点という評価点があるが、出席ではなく演習を成績として加算してほしい。

T：今後は、宿題などによる評価を行うよう努力します。

S：副手のサポート体制について、副手が講義内容を理解していないまま講義に臨むことも

多いのではないか？

T：副手が水理学をあまり理解していないという現状があると考えている。

副手に対して、事前教育も必要なのではないか？

S：事前教育は講義内容を事前に教えるだけ？

T：副手には事前学習をするように促します。

安田先生からの意見

土質力学の演習は、担当副手に演習問題を作成してもらっており、それによって副手が講義内容について理解を深めることができるのではないかと考えている。

S：これは勉強にはなるものの、時間外での対応が多くなるため大変である。

2. 近津先生への質問

S：講義中のスライドを講義情報へ掲載してほしい。

講義の予習・復習に役立てたい。また講義中の演習に関しては、教科書に記載されていない内容も扱っているため掲載してほしい。

T：講義の方でやっている演習の内容とその解答についてはアップします。

S：講義の進行速度が速くてついていけない。

講義の進行速度についていけない学生が多いのが現状であるが、手元に配布資料があれば先生のコメントを書き加えるだけで済むので、聞きもらしなども少なく、講義にもついていけるのではないか？

T：今後は講義の途中であっても、説明内容と教科書のページ番号の提示を適宜行っていきます。スライドの内容は基本的に教科書と同じであるため、コメントによる補足的な内容を重視した講義であったが、予習・復習のためであれば対応したい。

S：講義後の演習と講義内容にズレがある。

T：意図した結果ではないが、測量学の基礎を教えることを目的としているため、計算方法など基礎の基礎となる内容は演習でカバーし、講義ではその他の重要事項の説明を行うという意図がある。そのため、最初の数回におけるズレは仕方が無いと考えている。

Q. アンケート 20 ページ-式の原理誘導、説明をしてほしいとあるが、この要望はどれくらいの割合を占めているのか？本来大学の講義はこうあるべきだと考えているが、実際は理論的なことよりも、事例についての解説など実務的な内容を扱う講義が多いと思う。（高田先生）

S：測量の式の説明に関しては、資料を事前に配布してもらえれば内容が理解しやすいのではないかという意図の質問だった。また、高田先生の質問に関しては、やる気がある学生の意見に偏っている可能性はあるが、そういう学生も一定数いることを知って欲しかった。

Q. それについては賛否両論があり、教員側としては式の原理，導入のみを扱う講義では学生が集まらなく、また興味を持ってもらえないのではないかという懸念がある。そのためどのような学生をターゲットとした講義を展開すればよいか方針が定まらない。(有田先生)

S：講義の要点を押さえるために本当に大事なところについて丁寧に原理から解説してほしいという意図だと思われる。

T：学生の理解度をみて、講義の進行を行っていると思う。

S：もっと理解を深めたいという意図だと思う。

T：スピードを遅くするのはいいが、本来の目的を達成できなくなる懸念はある。

配布資料は教科書内容のままなので意味はないと思われる。

S：説明している内容と教科書の対応するページを提示して頂ければ大丈夫だと思われる。

配布資料について

T：学生側からして、配布資料が白黒の6ページ割り付けという形式は見づらい？

S：学生側としては、1ページごとの方が印刷など個人ごとで対応がしやすい。

T：容量の問題で、メディアセンターからクレームを受けたことがある。

T：そもそも講義資料を持って来ない学生が数名いる。

印刷のポイントがないなど、メディアセンターとの問題もある。

S：設計系の講義は、プロッターなどでポイントを多く消費する

岩城先生：メディアセンターに聞いたところ、理工学部学生の平均消費ポイントは300ポイントであるが、上限がないと無尽蔵に印刷される恐れがあるので上限を設けている。

ポイント不足の対処方法として、有料でポイントを追加するか、友人の協力を得て印刷する等が挙げられるが、今後はメディアセンターと交渉してみる。

3. 松井先生への質問

S：板書などのミスが多いので確認してほしい。資料などを減らして対応していきたい。

この解決策では、講義内容が薄くなる可能性があるのではないかと？

T：講義内容としては、既に過去のものと比較して1/3を削減し、後期の内容については既に修正したものを持っている。

板書は、講義の繋ぎとして式の誘導をその場で展開していきながらの説明となっているため、時間の都合もあり急いで書くと符号の反転などのミスなどが起こると考える。

T: そもそも学生からの質問がない。教員側としては、学生とのもっとコミュニケーションを図りたい。また講義内容について分からないところは、友達に聞くのではなく、教員もしくは副手に質問し、しっかりとした理解をしてほしい。

公式で大切なところは、繰り返し教えており、わかっている人はわかっている。
例えば、基本であるテイラー展開はしっかり理解してほしいが、そうでない学生が多い。この解決策として、講義内容そのものよりも、一度数学に立ち返って復習すればもっと理解が深まるのではないかと思う。

S: 講義資料に関しては好評であるので、今後はミスの修正を徹底して頂きたい。

学生からの質問の数について

S: どの講義においても質問する学生が少ないのは、質問しにくい環境だからなのか？

先生方の部屋もしくは研究室は、2号館に集中していて研究室に所属していない学生からすると行きづらいという現状がある。その解決策として、各教員の部屋の扉にオフィスアワーの時間について掲示や研究室の前に質問歓迎の掲示を行うなど、先生方から歩み寄る形も必要なのではないか？

安田先生: オフィスアワーに関しては、毎週決まった時間に大学にいるのは難しいため、メールでのアポイントメントが有効ではないか？

T: メールでの質問もあるので、メールで質問できるような内容ならメールでも OK。そうでなければ、メールでアポイントメントを取り直接相談しに行く形が望ましい。

近津先生: 基本的にはメールでのアポイントメントで止めておかないと処理だけで大変なことになる

T: メールには送信者の名前を入れて欲しい。

S: 先生方に直接質問しに行ける学生は少ないのが現状である。そのため、学生評価委員会としては、研究室単位で質問しやすい環境を作ることが大切であると考えている。

これについて、先生方の意見としては直接先生に聞きに来るのか、副手を通した方がいいのかどのように考えているのか？

T: 質問をしに来た学生の用事が間に合うなら副手による対応でもいいのではないかと考えるが、正確な解答が求めるのであれば先生方に直接の方が良いと思う。

S: 声が聞きとりにくく、また演習の時間中、後方で再履修生が騒いでいてうるさい

T: 応用力学は履修者が多くないのでクラス分けは難しい。注意をうながしてはいるが、学生同士で注意すべきではないかと考える。

S: 再履修生は先輩であることが多いので、彼らに対して注意するのは気が引けてしまう。そのため副手に対応して頂きたい。

4. 山崎先生への質問

S：板書の文字（特に数式中の添え字）が見にくいので、大きく書いてしてほしい。

T：講義の際に指摘があり、見やすい字を書くように心がけている。

授業中に言ってくれるとその場で対応できるから是非授業中に！

S：添え字の色を変えることにより、見やすくなるのではないかな？

T：図などにはルールを決めて色分けしているが、添え字の色を変えるのは難しい。

S：演習の量が多く、時間が不十分という意見があった。講義と演習の比率については、賛否両論あるが、次年度はどのような方針とするのか。

T：90分間は授業を行い、演習問題は宿題にするのが理想だと考えている。ただ、現実的には難しいので、現在の比率としている。そのため、内容によっては時間が足りない場合もある。

5. 岩城先生への質問

S：jwCADの使い方を教えて欲しい

他大学の建築学科のようにAutoCADやベクターなどソフトの使い方を教えて欲しい。建築設計系に進む学生に対してはあらかじめゼミなどが必要ではないかな？

T：CADに関しては悩みの為

AutoCADやベクターの方が使い勝手がいいことは間違いないが、ノートPCにインストールしていつでもどこでも図面を書いてほしいという意図があるため、フリーソフトであるjwCADを使っている。ベクターは有償のソフトウェアであるため、個人単位での出費が必要となる。CADはあくまでツールであるので、何度も使って慣れることの方が大切であると考えている。また、jwが使えるれば他のCADソフトにも応用することが出来るので問題ないのではないかなと思う。そのため、どうしても必要であると思う学生は自身で購入してください。

S：エスキスでのアドバイスが毎回異なるのは困る。

T：建築における設計にはこれが正解というものはないので、基本的には学生のをベースにアドバイスしている。毎回内容が変わるのは、提案する側である学生のが変わっているからであり、実際にやってみて初めてわかることも沢山あるので仕方ない部分もあるように思う。しかし、もう少し意図を加えた意見をするようにする。

学生に対する意見

T：学生の意見をベースに今後の方向を決めるのだが、学生が材料となる資料を持ってこないまたはしっかりと作りこんできてくれないという事実がある。しかしそれではしっかりと

とした指導もできないので、資料作りはしっかりやってきてもらいたいところです。

S：製作室の拡張について

T：製作室は昨年度までの2倍の広さになった。その意図として、製作室が広ければ同学年同士の集まりができるだけでなく、同じ空間内に異なる学年の滞留が可能になる。そのような空間を設けることで、上の学年から下の学年に図面の書き方を教えるなどの交流が生まれるのではないかと期待をしている。

S：その空間の中でも交流できない学生も出てくるのではないかと考えるのですが、その点のフォローはどうするのか？

T：岩城研究室の院生も製作室を利用すれば、模型作製の手伝いをきっかけにコミュニケーションを図れると思うので良いのではないかと考える。

S：大学院生は、先生と学生の間立場にあたるので、自ら積極的にコミュニケーションを取れる雰囲気をつくるために動くべきである。

田島

その他の先生方については、各自提示していただいたアクションプラン通りにお願いいたします。

Ⅲ. テーマ 2「開講してほしい科目について」

PC のソフトウェアの使い方の講座開講

問題点として、誰が教えるのか、副手であれば TA・SA 業務範囲になるかについて検討が必要である。これは遊びながらも良いので、実際に触れて慣れてみることから始めるのが良いのではないか。そのために講座などの機会を是非設けてほしい。

職業支援対策

研究室配属を決める段階で最終目標の方向性を決めているが、それでは遅いのではないか？そのために、職業についてイメージが湧くような、就きたい仕事を考えさせるものがあっても良いと思う。

Ⅳ. テーマ 3「学科のシステムについて」

実験については、講義と実験が同じ学年の中で受講できるカリキュラムを組んでほしい。もしくは、実験を先に行い、その学問のイメージ作りを行ったうえで、講義に臨んだ方が学生の理解が速いと思う。